

# 浄土

1987-3

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行  
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雜誌) 第三二五号  
昭和六十二年二月二十五日印刷 昭和六十二年三月一日発行

第五十三卷

三月号



春



### 三月の秀句

暖かや飴の中から桃太郎

川端 茅舎

唯今只春日爛干蝶も飛ばず

高浜 虚子

三月やモナリザを売る石畳

秋元 不死男

# 三月号



其の土に仏まします。阿弥陀と号  
したてまつる。

——『阿弥陀経』

## 目次

### 法話

春の足音……………八木季生……(2)

彼岸に想う……………成田光俊……(9)

### エッセイ

春窓雑想(一)……………戸川靈俊……(15)

### =江戸物語=(2)

江戸八町八町……………細田隆善……(20)

み仏とともに =24・最終回=

——浄土往生疑いなし——……………安居香山 ……(28)

### ◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第33回

歴史の空洞

……………寺内大吉……(35)

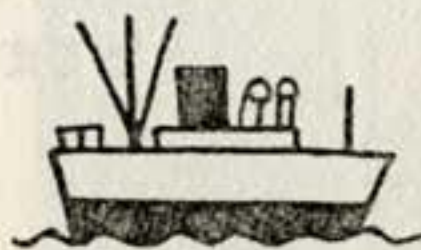
挿絵 松濤 達文

表紙絵「ねこやなぎ」 松浦春子画

(法)

(話)

# 春の足音



八<sup>や</sup>木<sup>ぎ</sup>季<sup>き</sup>生<sup>しょう</sup>

(大正大学講師)

日本の四季の中でも、春の訪れは誰の心にも希望を感じさせる不思議な魅力を持っている。

毎年のことながら、冬の終りに自坊の境内を歩いているうちに、ふと臘梅の甘い香を鼻たした時、寒い寒いと思っている心の中に、春の訪れの間近いことの希望を先ず感じさせられる。

やがて古木の梅の枝に、ポツリ、ポツリとふくらんだ梅の蕾みが花びらを開き始め、清楚なかな匂いをあたりにただよわせるようになる、春はもう足もとに來ている。

その頃毎年落の生えるところを探すと、土の中から落のとうが、小さな頭を出しているのが見付かる。それを採ってきて細かく刻んで、朝の味噌汁の中にいれると、ほろにがい春の味がする。

長い間、霜柱の立っていた霜が解けて、水気の多い表面に緑の草の芽が見え始めれば、もう春本番、彼岸も間近い。

来る年も、来る年も、冬の終わりに春の始めにかけての、何時も変らぬパターンでありながら、何十年となく同じであつても、すこしもそこに退屈を感じないで蠟梅が咲き、梅が咲き、落のとうが芽を出すのが待たれるのは何故だろうか。

それは矢張り春だからこそであつて、世の中がどんなに変化しても、年をとつても、春は喜びを感じさせ、生きていることのありがたさを感じさせるからである。

人は誰しも「生きている」と言うが、宗教家はこれを、生きているではなくて「生かされている」と言い換える。

生きると生かされるとでは、ほんの一寸したニュアンスの相違であるが、生かされると言う言い方には、我ならざる他の力が加わつて、はぐくみ育てると言う優しさがあ、目に見えない陰の力のおかげさまという感謝と喜びの情が感じられる。

現代人は殆どの人が生きるという感覚で生きており、生かされているなどという、と

んでもない、そんな言い方は何千年もの歴史の上にあぐらをかいている坊主どもの、言葉の戯れだと噛みついてくる。

生かされるという感覚は、単なる表現上の問題からそう言っているのではなくて、大宇宙の実相なるが故にそう言っているのであることを、宗教以外の別の視点から納得するに足る具体的な例証はないものであろうか。

そういった素朴な思いを長い間持っていたのだが、私はごく最近、宗教とは全く無縁と思われる近代科学の最先端をゆく科学者の口から、人間は生きているのではなくて生かされているのだという言葉を聞いて、大いなる驚きと共に喜びも感じたのである。

それは今年の一月十日のことであるが、東京有楽町の日劇の跡にできたマリオンの十一階にある朝日ホールで、筑波大学教授の村上和雄氏の講演の中で聞いたのである。

村上教授は、高血圧を引起こすことに深い関係を持っているホルモンに、レニンと呼ばれるものがあって、そのレニンの遺伝暗号を読解した、バイオテクノロジーの権威である。

そもそもバイオテクノロジーという言葉は、最近は身近に耳にするようになったが、この言葉は一九七〇年代に開発された遺伝子の操作や、遺伝子の組み換え、或いは細胞の結合といった新しい技術が、従来の生物に関する様々な技術と区別されて、生命工学、バイオテクノロジーと呼ばれているもので、生物、農学、医学の分野で、今や目覚ましい発達をしている。

バイオテクノロジーは、遺伝子、染色体、細胞核等に人為的な操作を加える技術の総称のことであるが、その中でも特に生物の遺伝に重要な役割を果たす遺伝子に操作を加える技術は、遺伝子工学と呼ばれ、バイオテクノロジーの中でも特に脚光を浴びている部門である。

この遺伝子工学という技術は、一言で言うならば、かびが人間のホルモンを造ってくれるという手品のような技術なのである。

例えば、インシュリンという膵臓から分泌されるホルモンは、血液の中の糖分をコントロールする大切な働きをするもので、このホルモンの分泌に支障をきたすと、糖尿病になるということはよく知られていることである。

糖尿病の患者にとっては、インシュリンに自分の血糖値を正常に保つ為に大変大切なものであるが、従来は人間の膵臓をすりつぶすとか、豚のインシュリンを使っていたが、高価な薬品である為に、糖尿病患者にとっては大きな負担であった。

ところが今やバイオテクノロジーの技術によって、かびによって、インシュリンを大量製造することが出来るようになった。

また制がん剤であるインターフェロンは、人の体内に侵入してきたウイルスや細菌から、人体を守るのに大きな役割を果たしている物質であるが、これががん治療に役立つこと

が明らかにされて、一躍注目を浴びたのである。

だがインターフェロンは、体内では極く微量しかつくられない。がん患者一人分のインターフェロンを手に入れるのには、一〇〇リットルの血液が必要である。それをインターフェロンをつくる遺伝子は大腸菌に組込んで増殖させたり、インターフェロンをつくるひとの細胞を六量培養する方法などが開発されて、この難問をバイオテクノロジーが見事に解決したのである。

驚くべきことはこの技術を使って、人間の遺伝にかかわる遺伝子の遺伝暗号を読むことまでが出来るようになったのである。

全ての生物は、親から子へ、子から孫へとその生物の持っているさまざまな形質を作り上げる設計図の情報を伝える遺伝子を持っている。この遺伝子の情報によって、生物のさまざまな形質の相違があらわれてくるのであるが、その情報内容は今まで全く分からずに、不可解な暗号とされていた。

ところがこれも先程のインターフェロンと同じように、人間の遺伝子に含まれている暗号を大腸菌によって繁殖させ、コピーをたくさんこしらえて遺伝暗号を読むことに成功した。三十億にのぼる人の遺伝暗号の全てが、今世紀中に読解されようとしている。

最近のバイオテクノロジーの発達の際には、今まではさんざん嫌われてきた大腸菌のおかげがあるのだが、なぜここに大腸菌が使われるのだろうか。

大腸菌は細胞一個で一つの生命体であるという単細胞の生物、それも核すら持たない生

物の中でも最も下等な生命体であるが、繁殖力は抜群に強いという六量生産の製造工場にはうってつけの条件を備えている。

問題は、生物の中で最も下等な大腸菌に、最も高等な人間の遺伝暗号が読めるかどうかにある。

ところか不思議なことに、生物の遺伝に関する暗号情報は、大腸菌も人間も全く同じ文字を使っているのである。従って人間の遺伝子を採って大腸菌の中に入れると、大腸菌は人間の遺伝情報を読み込んでどんどんコピーをこしらえてくれる。こうして人間の遺伝暗号の読解に成功したのである。

遺伝子とは、親の形質に関する情報を正しく子に伝える役目をするものだから、大腸菌も人間も、いや過去三十億年間地球上に棲息した一億種類にのぼる生命体のすべてが、同じ遺伝情報を使って、親の形質を子に伝えていたというこの事実から科学的に言い得ることとは、地球上に存在している生命体の源は一つであつた可能性が極めて強いということである。

しかも遺伝に使われている情報は、その複雑さ、巧妙さ、正確さ等あらゆる面から考えて、ただ何となく文字が集まったというのではなくて、誰かが意図的に書いたとは思えない。一体誰が、何の目的をもって遺伝情報を書いたのだろうか。

科学者は大自然が書いたものだというが、そうなると石ころの集まりと言われる大自然は、実は生命体そのものであつて、その生命体は、遺伝情報をまとめあげる知力や意志ま

で持っていると言わざるを得ないことになる。

いま世界中の科学者が、束になってかかっても一番下等大腸菌程度の生命体ですら作り得ないのに、自然は何億年の昔から生命の神秘を伝える情報を備え、その生命を生かし、生命を繁栄させ、無限の可能性を与え、細胞一つの中に宇宙全体に相当する秘密の全てを盛り込んで生かしている状態は、まさに奇跡としか言いようがない。

人は不思議な病気の直るのを奇跡と言うが、進んだ医学者、科学者の目から見れば、生きていくこと自体が大変不思議であり奇跡である。

遺伝子の情報を読んでいるのは、私の意思ではない。心臓を動かしているのも私の意志ではない。私は生きているというより、大自然の大きな力によって生かされているのである。私たちは自分を生かしてくれている大きな力に対する感謝を忘れてはならない、と、こう結論付けて村上教授の講演は終わったのである。

私は偶然の機会から、宗教とは全く関係の無い講演会の席で、これほど力強い宗教的な講演を最先端の科学者の口から聞いて、大いなる感激を覚えたのである。

科学と宗教とは、相反する立場にあると思われているが、達人の科学者は、宗教家より宗教的であるかもしれない。

(法)

(話)

# 彼岸に想う



なり  
成 田 光 俊  
た こう しゅん

(横須賀市専福寺住職)

彼岸を想いて身をば浄めよし

明日のわが身はたれぞ知るらん

きびしい寒さに耐え、冬枯れの林にも若々

しい芽が生えてくるとなんとなく「ホッと」  
する気持、なにかうきうきした心持になります。  
す。そのときに訪れてくるのが「春の彼岸」  
なのです。

この彼岸をむかえると、日頃は、毎日毎日の生活にのみ思いを寄せつづけ、あまり宗教や人生のことについて考えない人でも、いまは亡き親や子、兄妹に思いをよせて、ご先祖さまへのお墓参りに心をはせるのが私たちの姿のようです。

そのわたしたちも、いつこの世を去るか知っている人はいないでしょう。また「亡くなった人たちはあの世に行くんだよ」と、よく話をされていますが、さて、その行き先がどんな処で、どうしたら往くことが出来るかを理解している人も少ないと思います。

彼岸という言葉は、悟りの境地、平穏な姿を思い浮べますが、この期間は、心豊かな彼岸に到って生活することを願うとともに、丁度この時期は、昼と夜の長さが等しいこと

から右にも左にも片寄らない、仏教的にいえば欲や怒りに思いをよせず、正しく中道を歩む大切さを学ぶことをまさに示唆しているのです。

そのためには彼岸の対語である此岸、いまの日々をどのように生活すべきかを考える時でもあるのです。

彼の岸で安らかな日々を送るためには、六波羅蜜という……布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧……の六道を修行しなければいけないと論されています。何故その必要があるのでしょうか。

わたしたちはこの世に生を受けさせていだいた瞬間は、美しい、清らかな姿をしているように思えますが、日がたつにつれ、成長するにしたがって、悲しいことですが、醜い汚れた姿に変わってしまうようです。それは自我が育つにつれ、純真な心を阻害する「貪欲

・瞋恚・愚痴」という三毒の煩惱もそだつのです。

六道の一つ「布施行」は、ほどこすということですが、これは謙虚な気持ちになって、相手にする行為をいうのです。頭から「これをしてやるよ」「お前にあげる」といういとはないのです。

案外わたしたちは、物を貰ったり、他人のお世話になったことは、忘れがちですが、与えたこととしてあげたことは憶えているものです。「彼に物を与えた」「俺がしたんだ」……このような考えには、執着心が残るから忘れられないのです。執着心を捨て、させていただいた、このように思えるようになった時に、布施行になるのです。

「俺が」「俺が」の「が」をすてて

「お陰げ」「お陰げ」の

「げ」の日ぐらし

ある青少年団体代表者の会合の時のことでした。一人の婦人が「私たちの団体では、任期が二年しかなく、これでは名を残すような仕事が出来ません。せめて四年にしてみたいませんか」と発言されていました。この方々の団体は行政が委嘱をしているので、この期間をせめて倍の四年にしてほしい、といっているのです。

ボランティア活動が盛んになってきましたが、その考え方は色々です。このご婦人も、活動されている熱意には、頭が下り、感謝をするのですが、「名を残す仕事をしたい」と、ここに執着心があるのではないでしょうか。「今日も青少年の仕事をさせていたただいた、有難いことだ」と思える奉仕活動が出来ない

ものでしょうか。

何年活動をすると感謝状が戴けるからと、その職に汲々としている方々を見かけますが淋しく、悲しい気持になります。自分がさせていただき、それによって生かされている、この心が布施行です。

今は亡き保護司の方が「私は長く保護司をさせていただき本当に嬉しかった。もし保護司でなかったら、私も罪をしていたかも知れない、皆さんのお陰で生かさせていただいたことに、心から感謝しています」と、退任の時に話されたことが、耳に残っています。人の好意をつねに感謝して、自分の長い間してきたことが、認められようが、忘れられようが別に気にしないで、自分自身がとらわれない中道を歩まれたことが素晴らしいことだと思います。

子どもたちのため、他人のため、と思って

いるあいだは、生かされていないのです。

仏教は、亡くなった方のためだけ、と誤解されていますが、真実説いているものは「いま、いかにお互いが有難く生かさせていただくか、感謝し合え、助けられて日暮らしをしているわたしたちが、お互い拌み合いの生活を送る」ことを考え、そして実行することなのです。

世の中いかに物が豊富で、物優先の風潮があっても、心が豊かな人もあれば、反対に貧しくなってしまった人たちもあります。一般的に、総てのものが金や物で手に入ると錯覚しています。日々の生活、仕事なども他人のことより自分に都合がよいように、邪見になっているのがわたしたちです。そのわたしたちが、お互いの立場を考えて、正しく物事を

見られるような心の方向転換をするのが実践で、その方法が六道です。

布施の実行も困難なわたしたちが、自分自身をいましめる持戒、耐え忍んだ生活の忍辱、他を思いやりつつ仕事に励む精進、安らかな日々を送る禅定、正しい考え方を持ち続ける智慧を、自力で実践することは仲々むづかしいと思います。

自力にはおのずから限界があります。無力なわたしたちは、自力のみに頼らず、阿弥陀さまのお救いによって、彼の岸に行へ方法を素直に受けいれたいものです。

いそげ人弥陀の御船のかよふ世に  
乗りおくれせばいつ渡るべき

阿弥陀さまのお姿をよくご覧になると、お手の掌が広げられているのがお分りかになる

と思います。これは、悩み苦しんでいるわたしたちに「いつでもおいで」と待っていていられる姿なのです。

幼い子どもたちに「おいで」と手を差し延べた時に掌が握られていたらどうするでしょう。たぶん幼な心の中でも躊躇すると思うのです。それが、掌が広がっていると、なんの疑いもなく駆けてゆくのです。

わたしたちは、阿弥陀さまの掌が広がっていることに気がつかないでいるのです。その掌は、わたしたちの方を向いてもいるのです。それは「彼の岸に私と一緒に行きましょう。船を出しますから、急いでくださいね」と呼びかけてくださっているように思えます。

「なんでも出来る」と過信をしているわたしたちですが、日々の生活でも、ひとりでは

なにも出来ません。まして自分の生命についても、なにひとつ知ってないのです。これら頭の中で分っているだけのために、とかく忘れ過信をしてしまいます。心の中から、身体全体で理解をしなければだめなのです。

心で理解が出来ないのは、貧りという欲があるからです。「明日の生命は分らない」と思っている、「いや俺はもう少し長生きする」という欲で打ち消しているのです。苦しい日々が続くと、「何故自分だけが苦しむんだ」と他人の苦しみは忘れて愚痴が出るのです。このような欲や愚痴を、無くすことは出来ないので。しかし欲や愚痴によって、悩まされているのだ、と理解することは出来ません。それを教えてくださるのが、お念仏なのです。なぜお念仏で分るのだ、必ずといってよいほど問いかけてきます。

池に張った氷は、太陽の光で解け、お湯を

掛けただけでは全体は解けません。頭で分っている姿はお湯で、念仏の光が、太陽の光と同じ役割をしてくださるのです。太陽の光を見る事が出来ないように、お念仏の光も、肉眼で見る事は出来ませんが、自然に心の中に入っていくのです。自然に入るお念仏の光は、太陽が池の氷を解かすように、わたしたちの心を被っている貪<sup>ガ</sup>欲<sup>ヨク</sup>、瞋<sup>ガ</sup>怒<sup>リ</sup>、痴<sup>チ</sup>。愚痴という雲を照らし、心の姿を見せてくださるのです。お念仏を称えるという努力によって、阿弥陀さまの力が働き、心安らかな姿にさせていただけなのです。

阿弥陀さまのみ舟に乗せていただく努力がお念仏で、乗せていただいたあとは、全てを阿弥陀さまにお任せすることによって、彼の岸に着かせていただけるのです。いやいまのわたくしが、安心して働けるようになるのです。

エッセイ

# 春窓雑想 (一)



戸<sup>と</sup>川<sup>がわ</sup> 霊<sup>れい</sup>俊<sup>しゅん</sup>

(京都・左京区西住院住職)

山紫水明という言葉は、やはり、京都を形容するに最もふさわしい言葉に思える。その山といえは東山、川ならば鴨川であることは言うまでもない。

鴨川べりから眺める東山の翠巒は美しい。一代の詩儒頼山陽は、その東三本木の寓居山紫水明処から眺望して、四明ヶ嶽から始まり南して、稻荷山に到る東山の一々の峯に名を

付けて、山紫水明の美に詩囊を肥やしたとき  
れる。今でも、この書屋や近くの古い旅宿大  
和屋からの眺めは、そのかみの語り草の面影  
を伝えている。ただ、当時うつ蒼とした聖護  
院の森が、東山の前景から消えているのが惜  
しまれるが。

冬になるとこの頃は、鴨川に翔んでくるユ  
リカゴメの群れが多い。北の国から日本海を  
渡ってきたユリカゴメが、琵琶湖から比叡山  
を越えて、鴨川に遊ぶようになったのは、そ  
んなに遠いことではない。

鴨川の流れの綺麗なのは、二条の橋から北  
であろう。上流に溯るほど、京の街中を流れ  
る川ではあるが、鴨川は水が澄んでくる。

上流の高野川にも、賀茂川にも、陽を浴び  
て無数のユリカゴメが飛び交い、水に浮かぶ  
点々とした白さがすがすがしい。やがて樹々  
の芽ぶくとともに翔び去る日も近からう。毎

朝、パン屑を餌にして鳥たちをいとおしみ迎  
える老人の姿もいま暫らくであらう。鴨川の  
ユリカゴメは、冬から春への鴨涯を彩る一風  
物詩でもある。

わたくしは、川べりでも、出町柳あたりか  
ら賀茂川の西岸―若狭街道と呼ばれるこの道  
を、北山の峯々を望みながら歩むのが好きだ。

花背峠であらうか、京見峠であらうか、丹  
波の国につらなる北山の連山に、かすかに白  
きもの雪を見る頃になると、京の冬の訪ずれ  
を覚え、そくそくと迫る京の冬の底冷えを感  
じる。街道の櫨や樺の老木に若葉の芽生えの  
香を嗅ぎ、斑雪のけむる北山の奥を見上ぐる  
頃には、京の春の跫音の訪ずれを感じるので  
ある。

御蔭橋のあたりから、若狭街道を北上して、  
眺める東の堤に咲き誇る花は一幅の絵である。  
朝まだき、人通りも稀な澄んだ空気の中に、

染井吉野の白の明るさが清々しい。半木なかりぎの森を背景に浮かんでくる花の盛りは、喧伝けんでんされる円山の桜も嵐山の桜も遠く及ばない。景観を害うような高層建築のない賀茂のこのあたりの自然がいつまで続くことであらうか。

その向うに聳える比叡山は、四条・五条あたりから眺めるのとはすっかり異って、北はまだらの残る比良山、奥比叡から南に連なる東山の峯々を統べ、まことに都富士の名にふさわしい素晴らしい山容である。右手に如意ヶ嶽が、都富士を傍から支えるように、若草萌える「大」の火床が鮮やかに見える。

およそ、四明ヶ嶽が都の東北の山と称されたのは、仙洞御所や大宮御所を中心とした辺から見る景観のせいであらう。



上賀茂神社のあたりも、だんだん開発の波

が押し寄せている。それでも、室戸台風の災害の時分、無残に木々の枯れて見る影もなくなつた神社の森は、五十年の歳月を閲みするとすっかりもとの繁みにもどつたようである。

拝殿の階段の前には神の憑ります神代こうしろを象徴する二つの砂盛りが、崩れずに整えられて、いつも清々しい。神苑を小川が流れている。

この水は、神社のご神体とされる神山の麓の蟻ヶ池、小池から流れ出ているのであらう。冬はいうまでもないが、春も夏も掬む手に冷めたく、そして涸れることなく、静かに豊かな水量で流れている。こうして神苑を流れ出ると、神明川となつて社家町を流れ、社家屋敷の庭園の泉水に引かれてゆくのである。

明治の治世になる迄は、国に重大な事が起ると、朝廷は、先づ使を遣わして祈り、神託を乞うたのが、この賀茂の社であつた。

わたくしは、山城一の宮であるこの神社を

中心とするこの町の雰囲気というか、環境が非常に好ましい。戦後、近くにマンモス大学の一つが創設されて、その学生街に化さんとしつつある環境ではあるが、それでも風格を未だに残している社家の家々、古風な門構えの一軒の酢茎を販ぐ店のある神明川沿いのあたりには、古き時代の洛北の面影が漂っていることを思う。

鴨脚、梅溪、樹下など社家の屋敷の主は、ほとんど替ってしまっているが、旧い名を想い起しながら神明川にかかる石橋を渡り、小路に入っていく。

学生の頃、教えを乞うて門を叩いたことのあるリチャード・ホンソンビー氏の門は今どこであろうか。

イギリス人で、殊に日本を愛し、日本神道について造詣深く、本尊美利茶道の漢字名で、いくつもの秀れた論文を発表されていた。さ

きの大戦は、不幸にも、この大和の国と人とをこよなく愛した外国の学者を、失望させたのであろうか母国に去らしてしまった。

漢字名の標札のかかっていた旧い門を探ねあぐねて時を空しくしてしまった。

千古斧錢を入れないというのでないが、糺の森は数多くの種類の樹木を擁して貴重の存在で、また無数の昆虫類の生息の場所でもある。森の中を、常に湧き水を湛えて流れるのは瀬見の小川である。賀社と同じようにこの川の美しさは、古くから歌にもよく詠まれているところ。

上賀茂に対して下鴨・賀茂別雷神社に対して賀茂御祖神社。上下賀茂の土地は、むかしは神の地とされて、仏教臭いものは、すべて忌避された。仏寺の一字も建立を認められなかったことは言うまでもない。死者があると、その葬りは、早速に、賀茂川対岸か出町柳あ

たりの仏寺に移された。その殆んどは浄土宗に属する寺々である。

今は、そんな古い風習は残されていないが、寺院の姿を見ないのは、昔のままである。

僅かに、市中の区画整理で逐われて移ってきた民家造りのままの真宗の一寺院か、この神の地に存在するのみである。



こうした神社を中心とする古い土地では、今に残されている伝承・民俗・慣習の類は珍らしくない。

わたくしは、嘗て「賀茂氏族の宗教生活」というふうなことを考えたことがある。

先住氏族である出雲系の賀茂氏族には、いまに残る呪術宗教めいたものの中に、大和系のとは異った片影で窺がわれようかと。高野川と賀茂川の形成するこのデルタ地帯に、鳥

をトータルとする信仰を尋ねたことであつた。

地方にある加茂の名のつく集落、そこに祖神八咫鳥を祀る鴨社。宗祖法然上人が四国配流の日、下船して参拝された室津の加茂明神。母君秦氏の賀茂の社家の出自であつたとの伝承。賀茂の河原屋への賀茂社の助力のこと。

宗祖との由縁も深い賀茂社である。

勢観房源智上人に与えられた真筆の一枚起請文は、夏の曝涼の日、その拝観に都人が群集したという。しかし浄土宗からの申入れで、それ以後は永く蔵に秘められたとの伝えを教えてくれたのは弘法大師の母方の血筋につながる在野の史家であつた。

新しい芽を吹く糺の森の下道を、瀬見の小川の流れに沿うて歩みながら、北から南から近づいてくる地下鉄の工事に、このあたりのこの雰囲気、いつ迄つづくのであろうかと思ふのである。

(つづく)



## 江戸物語

(2)

### 江戸八百八町

細田隆善

(俳号・豊明)

江戸は、内濠内うちぼりの内郭うちくるわと外濠内そとぼりの外郭そとくるわからなるわが国最大の円形の江戸城を中心として発展した巨大都市であった。

欧州最大都市ロンドンは、享和元年(一八〇二)八十五万人、天保二年(一八三一)に百四十七万となった。元禄時代から文政時代まで(一六八八―一八二九)江戸は、百三十万人の世界最大の都市であった。大阪の人口が最大になったのは明和二年(一七六五)四十二万人であった。

江戸は全国総城下町  
江戸は世界一の人口  
江戸は日本の縮図  
江戸で日本の富の半ばが消費  
江戸文化の出現

また当時京都は三十万人であった。

鐘一つ売れぬ日はなし江戸の春

と詠まれたように、江戸は一大消費都市でもあった。江戸の人口の半ばが武家関係であり、江戸の面積の七割までが武家地であったから、江戸は武家の町といわれた。

| 区 分                |     | 面 積             |        | 人 口<br>人  | 密 度<br>(km <sup>2</sup> 当り) |
|--------------------|-----|-----------------|--------|-----------|-----------------------------|
|                    |     | km <sup>2</sup> | %      |           |                             |
| 江戸時代               | 武家地 | 59.97           | 68.58  | 650,000   | 10,838                      |
|                    | 寺社地 | 13.65           | 15.61  | 50,000    | 3,663                       |
|                    | 町地  | 13.82           | 15.81  | 600,000   | 43,415                      |
|                    | 合計  | 87.44           | 100.00 | 1,300,000 | 14,867                      |
| 東京15区<br>(明治11年)   |     | 87.44           | —      | 799,991   | 9,149                       |
| 東京相当区地域<br>(昭和62年) |     | 87.44           | —      | 1,440,959 | 16,479                      |

—江戸の人口と面積—

幕府は江戸城本丸をはじめ旗本御家人の武家屋敷を所管し、大名は享保七年(一七三三)二百六十四人、それぞれ江戸に上屋敷、中屋敷、下屋敷、蔵屋敷などを所有することにより広大な武家地が心要となったのである。武家地以外残りの三割が寺社地と町地であって、それぞれあい半ばである。この狭い土地に人口の半ばを占める町方の町人がひしめいていた。人口密度からみると武家地は平方キロ当たり一万人、明治十一年(一八七八)東京十五区が出来たときにはほぼ一致する。ところが町地の人口密度は、平方キロ当たり実に四万三千人、現在の東京の十五区相当区の三倍近い過密状態であった。現在のように高層化されていない当時、大変な過密状態だったことがわかる。

江戸時代初期の町人の男女のバランスは不均衡であった。享保時代から延享時代まで(一七一六—一七四七)男が六三%、女は三七%だった。幕末、弘化元年(一八四四)には男五二%、女四八%と不均衡は緩和されたが、これが江戸に花町の賑わった理由の一つになった。武家の人口の内訳は明確ではないが、男性がより多くを占めていた。



——町人のひしめく下町——

江戸の町人は山の手より下町に多くが住んでいた。高台の多い土地山の手に対し、下町は低地であるという地理的な理由から、山の手と下町は対称的に使用されてきた。山の手地区に武家地が多く、下町に町地が多いため、支配者に対しへり下った意識から区別されたという。また下町は江戸城の膝元であるという誇りを持ち御城下の町という意味から、省略して下町と称したという。ことに江戸時代中期から、江戸文化が盛んとなり、下町はその中心であったから、その誇りの意味も加わったという。下町は外国都市にあるダウントウンと異なり、時代とともにその範囲も拡がり、地域も内容も変化し、いろいろな要素が混合してできた言葉であって、一つの意味ではない。

江戸は、幕臣と地方武士、地方武士と地方武士、武家と町人が接触したり対決したりした場であり、ここに活性のある自由性の高い江戸文化が創造し発展したものである。自由奔放な江戸文化は、時々幕府の圧迫を受けるほどであった。町人の住む町の数、俗に江戸八百八町というが時代とともに変化している。町数は正徳三年（一七一三）九百三十三町、それ以前は六百七十四町であ



——船頭の長屋（深川江戸資料館）——

った。延享年間（一七四四—）には代地町が増加して千六百七十八町になった。この町地の町人の所管は町奉行であった。神社仏閣の所管は寺社奉行であり、大名武家の所管は幕府機関であった。

江戸の六分の一の土地に江戸の人口の二分の一がひしめいていた町人は、多くは借家住いであって、自分の土地に自分の家で住んでいる町人は三割に過ぎなかった。町人の職人たちの多くは長屋住いであって、十軒長屋、二十軒長屋の棟割、木端葺屋根の住宅に住んでいた。長屋には熊さん、八さんはもとより、大工、左官、屋根屋、髪結、師匠、野菜魚介類を天秤棒でかついで売り歩く棒手振り、日雇、駕籠かき、馬子、車引などさまざまの人が住んでいた。

長屋の多くは向かいあって建てられ、中央に狭い路地、真中に溝板を渡し下水が流れていた。入口には木戸があって朝開けて夜十時に閉める。便所、井戸は共同、ゴミ溜箱もあって結構清潔な簡易共同住宅であった。最低の長屋は「九尺二間の裏長屋」と落語にでてくる三坪の住いである。間口九尺、奥行二間、部屋は四畳半の板の間、畳でなくて筵が多い。土間は三尺、ここにへっつ

い(かまど)水がめがあり、食器類は棚、入口障子は上部が紙張り下部は板張り、障子に名前を書く、中から心張り棒をかけて休む。押入れはないから寝具は枕屏風の内側に畳んでおく、衣類は吊るか紐にかける。長屋の一隅には赤いぼりの立っている稲荷社を長屋共同で祀る。柱や棚に内仏様、神棚、荒神様を祀る。長屋はこれより大きいのはさまざまであり、二階建てもあり、一戸建てもあった。家屋や部屋を借りている者を店子(正しくは店借、土地を借りているものは地借)といい、大家(正しくは家主)屋守ともいい家賃を徴収する。

江戸っ子は風呂好きであったが、各家庭には大家といえども風呂はなかった。しかし各町内に二、三軒の風呂屋、湯金(銭湯)ともいうのがあった。夏場は行水ですませたものである。銭湯は寛政六年(一七九四)には大人十文、子供六文であった。(そばは十六文)長屋の共同便所は貴重な施設であって、近在の農家が契約して収集した。これは大家の収入、金肥のない時代は重要な肥料であって、肥桶で運び舟で運んだ。武家屋敷もまた農家と契約をしたものである。江戸で困ったのは生ゴミである。各町ごとにゴミを収積してゴミ舟によって深川沖な

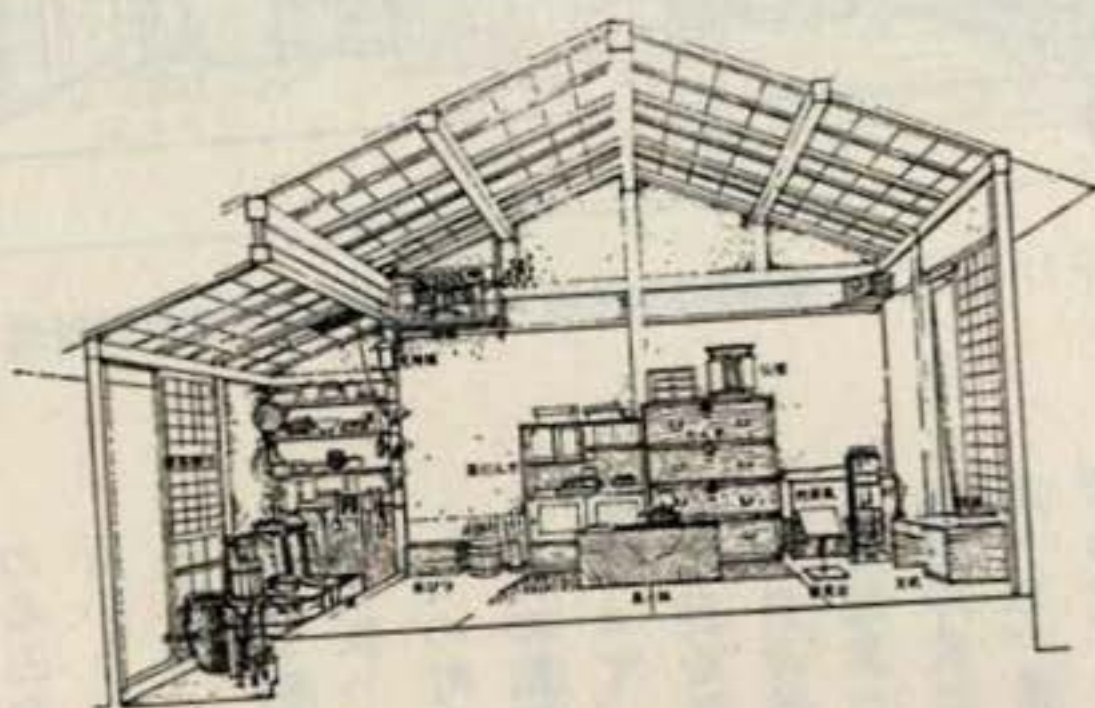
どに捨て埋立造成に利用した。現在もまだゴミの埋立てが繰り返えされている。このため各町ではゴミの処理や祭礼に支出があり、町会費をもってこれにあてた。井戸、便所、ゴミ、祭礼などが町内共同であるところから、お互いに助け合う隣人愛、相互扶養が高まり、自分たちの町は自分たちで処理する自治精神が育ち、他の都市には見られない自治制度が実を結び、明治十一年(一八七八)東京十五区が誕生したときにも生かされ、現在の特別区制度に発展し、東京二十三区の特別区は区長、区議会議員を選挙する制度になったものである。本年四月にはこの特別区地方選挙が実施される。

江戸の町人の最高の行政機関は江戸町奉行である。この役職は武家であるが、その下に町年寄があつてこれは町人である。町年寄は名字帯刀が許されて武士と同格であり、最高の町人の役職である。町年寄は樽屋、奈良屋、喜多村の三人が代々世襲し、それぞれ屋敷を与えられ、そこを役所として手代を置き事務をとり、江戸各町の総名主の上にあつてこれをまとめ、町奉行所との連絡に当たった。この町年寄の下に町名主がいて町政を司った。享保七年(一七二二)には名主は十七の組に分かれ、その

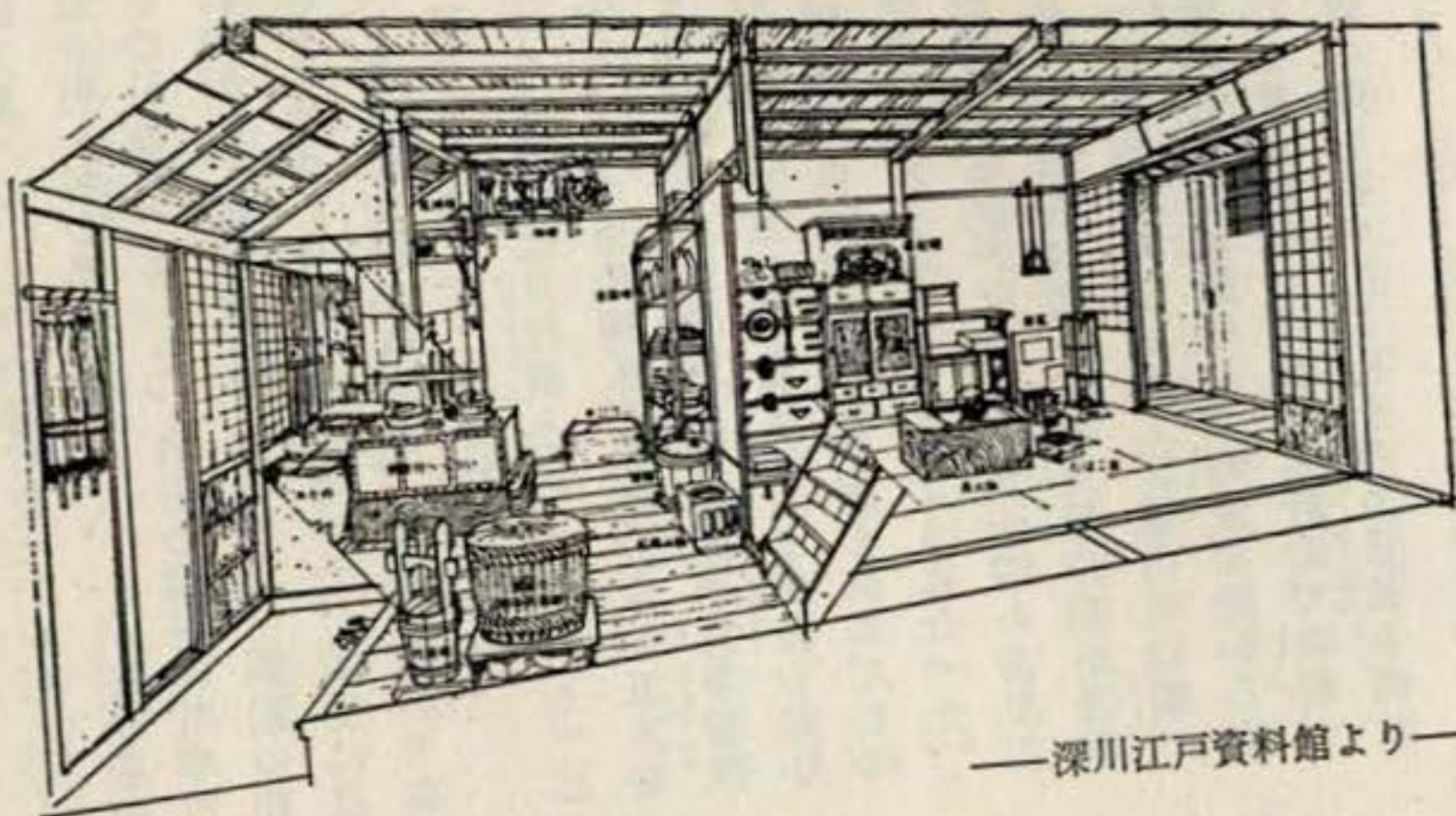
— 棒手振職人の長屋 —



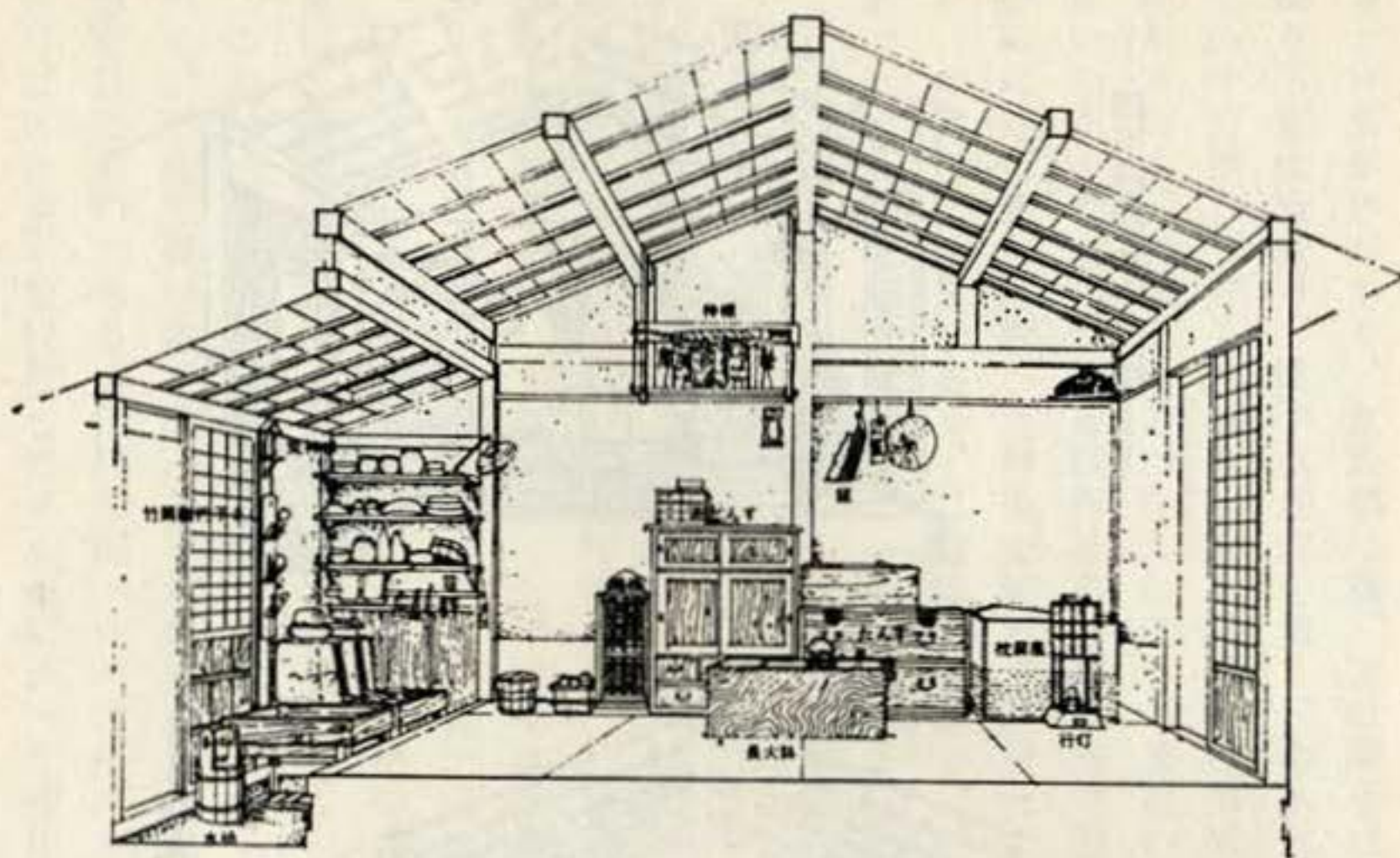
— 読みかき、手習い、裁縫、  
三味線師匠の長屋 —



— 船 宿 —



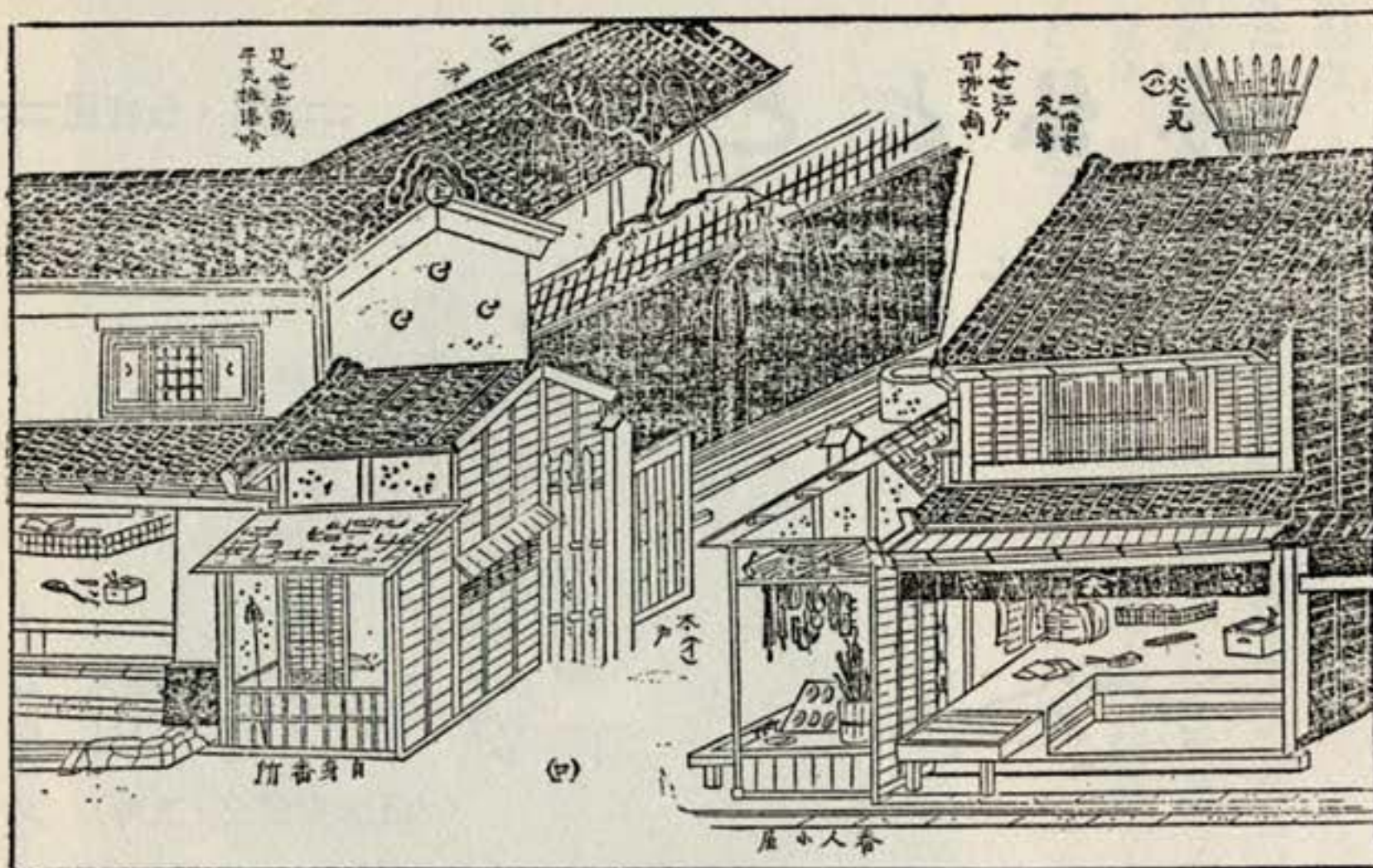
— 深川江戸資料館より —



——木場の木挽職人の長屋（江戸深川資料館）——

数は二百六十四であった。江戸の総町数は千を超えていたので、名主は一町一名の場合は少なく、一名主が数町の名主を兼ねるのが通例であった。名主の職務は町奉行所からのお触れの伝達、戸籍調査、防火事務、訴訟の和解事務、家屋屋敷の買売の確認事務であった。名主は自宅を事務所とし、居宅に玄関が許され、玄関において事務を執った。一般の町人は玄関は許されなかった。

この町名主の下に各町には月行事（「がち」ともいう）五人組の組織があった。地主の代理人である家主が五人組を作って、これを月行事という。月行事は町内の自身番屋で事務を執った。ここに事務補助員として書役を置いた。自身番屋は当初地主自身で順番に執務したのでこの名が起きたが、家主や雇人を勤めさせるようになった。番屋の数は嘉永三年（一八五〇）には九百九十四の番屋があった。番屋の規格は制限されていて、九尺二間が通例であり、屋根に火の見を作り半鐘を吊し、屋内には懸、鳶口、竜吐水、玄蕃桶などを常備した。町費節約から老人などを安く雇用して番人にした。番人も軒先で草鞋、駄菓子、荒物、雑貨の類を並べてこれを売り日銭を稼ぐようになった。



——自身番屋と木戸番（『守貞漫稿』）——

また町内警備のため自身番とは別に木戸番<sup>きどばん</sup>を置いた。木戸は朝開け、夜は午後十時に閉め、あとは潜戸<sup>くぐりど</sup>から出入させた。木戸番は二人が勤め、住み込みで番太郎<sup>ばんたろう</sup>または番太<sup>ばんた</sup>と称した。町内からの支給は安いので、駄菓子、蠟燭<sup>ろうそく</sup>、糊<sup>のり</sup>、箒<sup>ほうき</sup>、チリ紙、瓦火鉢<sup>かわらひばち</sup>、草履<sup>ぞうり</sup>、草鞋<sup>わらじ</sup>、焼芋まで売って生活の足しとした。木戸番人は町の治安と火の番が主たる勤めで、番屋の規格は自身番屋より狭く、九尺一間であったが、狭いのでこれは守られていなかった。名主、家主、五人組、月行事にある者を町役人と称し、江戸市政の末端機構であり、自治意識を支え、人口移動の多い江戸の町の治安防災に役立ち、僅かの町奉行配下の治安当局によって、江戸の治安が保たれたのである。

裏長屋一と目で解る暮し向き

初枝

長屋には長屋の掟路地に貼り

喜造

どぶ板を鳴らし長屋へ大家来る

豊明

（つつく）

# み仏とともに

＝24・最終回＝

—浄土往生疑いなし—



やす い こう さん  
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

父が何故に念仏も申せぬようになり、笑いさえでてこなくなつたのか、これは父自身にも分らなかつたよう  
で、そのことは、前に掲げた父からの手紙によって、明  
らかに知ることができた。

しかし、父には確かに、貸した金の帰ってこないこと  
が、一つのショックであつたのではないかと、私なりに  
考えている。み仏の為への善行が報われなかつたことの  
ショック、これが一つの原因ではあつたのではないか。  
勿論、お念仏を申すということは、そんなものとは全く  
無関係な筈であるが、父にはそうしたことに對する苦し  
みもあつたのではないであらうか。

それはとも角として、父の手紙にもあつたように、昭  
和二十五年頃から、生活に大きな変化を、父は人目にも  
分るようには起していた。母や兄達は大変心配し、いろい  
ろと慰さめ、時には、励ましたりしたが、一向に変らな  
かつた。そして終には、「もう死んだ方がましだ」とも  
言う程になつた。

昭和二十五年頃から始まり、三十一年に亡くなつてい  
るのであるから、その間、六年間である。私は時たま帰  
る位であるからそれ程ではないが、父を取りまく家族達

の心配は、大変なものであった。

兄たちが心配して村の医者などに見せもしたが、特に精神的に異常はないということであった。それでも心配した兄は、手紙で私に相談して、京都大学病院でみてもらうことになり、いつの頃であったか忘れてしまった



——晩年の父——

が、私も京都に行き、大学病院に連れていったことがあった。

大した病状ではないが、電気ショックを一度かけてはという医者の進めもあり、これをやってみた。一時はすっかり元に帰ったが、またしばらくすると通りの症状がでてきた。そして、母に向かって「死にたい」ということもしばしばあったらしく、母も大変苦勞したようである。その為、一時は父から目が離せぬことがあったらしい。

然し私が帰って父と話をしてみると、理路整然と話をして、まったく取り乱した所などもなく、あたかも普通人のようであった。ただ笑いと、念仏は消えてしまっていた。

後日、私が父の書類を整理していたところ、私から送った手紙を束にしてとってあったのがみつかった。父はこれを大切に、何回も読み返してしてくれたのではないであろうか。その一つに次のようなのが、残っていた。何時のものか、日時は余りはっきりしないが、父の病氣のことにふれているので、その頃のものと思われる。おこがましいが、当時の状況を知るためにかかげて

みたい。

秋も深く相成り、皆様も色々多忙な事と存じます。

爾来元気で居られることと思いますが、尚父には何と言う事なく、落ち着かずに居るのではないかと、遠察し居ります。

幾度も言う事乍ら、父上の迷いは、何としても父自から招いた悲しい運命である事を、よくよく考えて頂きたいと思います。

仏の願力を信ぜぬ者には、どんな救いもない様に、父には何者も信ずることが出来ないように、なってしまうているのです。

自分の力さえ信ずる事の出来ぬ父上には、私の言う事も、兄や姉や母の言う事も、そして又、医者 of 言う事さえも信じぬのです。

京都での治療で、父は一度治った筈なのです。周りの者も、決して御上手ではなく、父の行動の中に、それを見取ることができたのです。然るに父は、之を一寸も信じようとしません。唯自分の考えだけ

で、治っていないのだと判断してしまっているのです。治っていないと思う心が、又重なり重なって来ると、又迷いを重ねて行きます。そして、父は再び自ら迷いの穴に入って行くのです。何と言う残念なことでしょう。

何事も信じない事程、恐ろしい事はありません。私達は、今の生命が、明日も、明後日もある事を信じる故に、生きて行く事が出来るのです。若しこれを信じなかったら、どうして、こうして生きられる事でしょう。

同じように、若し父が自分と言う者を知らないで、どうして正しい生き方が出来る事でしょうか。医者でさえ、治ったと言って居たものを、再び元の様になるという事は、父自身が招いた大きな罪惡と言うものです。もう少しこの点考えて下さい。

医者の言う事を聞く事も、必要な事は言うまでもないのですが、医者の言う事が信じられない様では、意味ないことです。

又、電気治療でも、よい点と悪い点があり、これのみに頼る事は、危険な事です。出来れば自分の力

で治したいものです。

家の者は取り入れて、今忙しい最中の事でしよう。父はこうした時、静かにして、一切を他人にまかせて欲しいものです。家の者がどんなに苦しい目にあっているかを静かに考えて下さい。

私も元気にしています。今度は真彦先生の所（林真彦師）で一緒に生活して、勉強する事にしました。

私の事は一切心配しないで下さい。

右激励まで

不二

父上様

香山

随分偉そうに、父にお説教をしたもので、おはずかしい次第である。しかし、田舎の孤独な父、苦勞する家族の事など考えて、私なりに精一杯父を励ました手紙なのである。釈迦に説法をするようなものであるが、私にしてみれば、一生懸命であったに違いない。

しかし、今静かにこれを読み返し、こうして追憶の文を書いていると、果してこれは、父にとって救いとなつたであろうかと、疑わざるを得ない。父にしてみれば、

父からの前の手紙にもあったように、百も承知のことであるのである。それ故に念仏が出来ず、笑えぬことに苦しんでいたのである。

そう考えてみると、この手紙は寧ろ私の父へのお説教あり、詰問状であり、取りようによっては脅迫でさえあったのではないであろうか。それだけに、父は私からの手紙を、大変な苦痛を以て、受け取っていたのではなかったであろうか。もしそうであったなら、と思うと、今は慚愧に堪えない。

私は、何度かこうした手紙を出している。その幾つかを、父は大切にしておき、時に読み返していたのではないであろうか。そして、脅迫状にも似たこの種の手紙は、やがて父を死に追いやることとなってしまうのではないであろうか。若しそうだとすれば、私が父を殺したことになる。何と申し訳けないことをしたのであるうか。悲しみに堪えない。父上には、どうか、この罪深い私をお許し頂きたい。

今更あやまっても、いかんともすることができない。そして、いろいろの経過があつて、父は自から命を絶つて、浄土に行ってしまったのである。

しかし私は、父はこの死を決して後悔していないと、今は思っている。

いやむしろ、父は喜んで、浄土に往生していった。そして今は、浄土の極楽の蓮台の上で、楽しい毎日を母と共に過していると信じて疑わない。そして、残ったわれわれに、「しっかりやれよ」と言っているに違いないと、思っている。

父の死への旅路は、まことにすばらしいものがあつた。いつ頃から身辺を整理していたものか分からぬが、すべてにわたって、整理されていた。残すべきものは残し、残してはならぬものは整理してあつた。決して病人でも、気の狂った人でもなかった。

そして、死ぬその日には、身を清め、着物を着がえ、寺や墓にも詣り、川に精霊を送り、ご先祖が極楽に帰る道連れに、肅然と、静かについていったのであつた。この死への旅路の前後を見ると、極楽往生間違いないと私は思っている。寧ろ父は、この穢工を離れて、喜んで浄土に往生していったことと思うのである。鉄道に身を投げたはずなのに、かすりきず一つなく死んでいたということも、捨身供養ではないが、み仏がずっと両手でおす

くい下され、浄土に連れて行ってくださったのではないであろうか。



父が亡くなつて、もうすぐ三十三回忌である。私もこの父にまもられて、今日まで生かさせて頂いたと感謝している。父の希望は一つも満たさなかつた不肖な子ではあるが、漸くにして父や母の有り難みが、身にしみて分る今日この頃である。

果してこれから私は、どれ程にこの世に生かして頂き、父のいるお浄土に行く日がくるか分からぬが、その時は、ゆっくりと多くのみ仏に守られた草々の話を、父に報告したいと願っている。ここで改めて、父や母の冥福を祈りつつ、永い思い出の記録を、お十念と共に、終りたい。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、……………南無阿弥陀仏  
南無阿弥陀仏

(終)

五月書房選書

三月中旬刊

大正大学教授・文学博士  
全日本煎茶道連盟顧問  
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

# 正坐の文化 出版のご案内

◆煎茶道の文化とその思想◆

■永年にわたり書きためてきた、煎茶道・着物・花・正坐論を一冊にまとめ著者の日本の伝統文化観をここに開陳する。是非ご愛読下さいますようご案内申し上げます。

●推薦します●

黄 檗 宗 管 長

全日本煎茶道連盟会長

装道きもの学院 理事長

装道礼法学院

村 瀬 玄 妙 貌 下

山 中 典 士 先 生

■内容

一章 正坐の文化

二章 煎茶道の歴史と思想

三章 売茶翁に学ぶ

四章 茶道小論

五章 茶と旅

六章 茶事漫筆

■体裁

四六判／上製／口絵二頁 定価一、六〇〇円（〒二五〇円）

五 月 書 店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五

電話 〇三―二三三―四一六一

振替 東京九―三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇―二四六三

## ◎『維持会員』へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしまいにりました。すでに『浄土』誌は五十三巻に入り、鑽仰会創立以来五十五年をけみしてきました。近年は、弊会の活動も、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して預いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会





則天武後の殺人狂奏譜は永徽六年(六五五)に王后、蕭淑妃、自ら生んだ女兒に始まり、そして乾封元年(六六六)に姪の魏国夫人を毒殺するまで、十二年間で十数人に及んでいるのだ。

それが乾封二年(六六七)以後は、びたりと終息した。約九年間、血の旋律は一度も奏でられなかった。

現在長安城で皇太子として病弱の皇帝高宗にかわって朝務をみている李弘は武后自身が腹を痛めた実子である。わが子の地位を脅す最大のライバルは評判の良い雍王李賢だった。当然武后は殺さぬまでも他の兄皇子たる沢王李上金や許王李素節たちのように田舎の刺史へ追いやっていなければならない。李賢にまつわる評判の良さは、むしろ武后自身が言いふらしたためなのであった。

少年憚良ならずともこの時期における則天武後の懺悔生活が真実なものだったことを裏付けている。

竜門石窟の大盧舎那仏彫像が完成すると、半年もすぎないのにまたぞろ則天武後の血塗れた魔の手が動き出した。ということになっている。果たして、実際にそうだったのであろうか。

上元二年(六七五)四月、久々の犠牲者が出現する。それが何と武後の実子、皇太子李弘であった。ただしこの毒殺には確証がない。話は先走るが「資治通鑑」の記載を読むことにしよう。

——太子(李)弘、仁孝謙謹にして上(高宗)甚だこれを愛す。士大夫を礼接し、中外、心を属す。(武后)まさにその志を逞しくす。太子の表情をしばしば旨(むね)に逆らう。是によりて愛を天后に失う。義陽、宣城の二公夫、蕭淑妃の女なり。母の罪を得るに坐し、掖庭に幽せられ、年三十を越ゆれども嫁せず。太子これを見て驚惻し、にわか奏して、出だし降さんと請う。上(高宗)これを許

す。天后怒り、即日、公主を以て、当上の翊  
権毅・王遂古に配す。己亥、太子、合璧宮に  
薨ず。時人おもえらく、天后、これを酖（ち  
ん）せりと。

皇太子李弘の評判は甚だよろしかった。母  
の武后はそれを嫉妬した。時たまたま、亡き  
蕭淑妃の娘（公主）二人が三十を過ぎても独身  
で宮廷に閉じこめられていることを李弘は知  
った。高宗に願って兩人を嫁入らせることに  
した。武后は、身分の低い軍人たち（靖權踐と  
王遂古）にこれを妻合わせた。このあと李弘  
は合璧宮で死んだ。時の人々は天后（武后）が  
毒殺（酖せり）したと噂し合ったというので  
ある。

時人の噂であって李弘殺害の確証はない。  
「資治通鑑」はさらに続ける。

——五月戊申、詔を下す。「朕まさに位を  
皇太子に禅らんと欲せり。而るに病みて、に

わかには起たず。よろしく往命を申（の）べ、加  
うるに尊名を以てすべし。諡（おくりな）して  
孝敬皇帝となすべし」と。六月戊寅、雍王賢  
を立てて皇太子となし、天下に赦す。

高宗は詔を発し、じつは早く自分は李弘に  
帝位をゆずりたいと考えていた。だが今俄か  
に死んだ。せめて孝敬帝の名を贈って慰めた  
い、そして、皇太子に雍王李賢を立てたので  
ある。

実子を毒殺して、韓国夫人の遺子を皇太子  
に推したのは、なぜだろうか。武后にはなお  
李哲、李旦という二人の息子がいたのではあ  
る。兄は十九歳、弟は十四歳だった。どちら  
を皇太子の座に就けても不自然ではないし、  
高宗も異論をさしはさまなかったであろう。

やはり武后は、贖罪生活を続けていたのだ。  
血を分けた李哲や李旦を無視して姉の子  
李賢を立てたのも姉韓国夫人への供養だった

にちがいない。

「資治通鑑」に限らず、中国の古代史家は則天武后を悪女ときめつけすぎるようだ。かえって近代の鍾沫若あたりがその真価を認めている。

ところで竜門石窟の彫像にかかる前、武后は連日のように王徐明を呼び入れた。おのれの容姿顔貌を画帖に写させるのであった。

武后を模写すれば、亡き韓国、魏国夫人の面差しがそこからにじみ出るであろう。

「亡き人のおもかげを片影でもこの世に残そうとすることほど深い供養はありません」

武后は満ちたりた声を王徐明へかけた。

「そうですか」

「近ごろ私は毎晩のように姉や姪の夢をみます」

「夢ですか」

「夢のなかで、あの人たちはいつも明るく笑っています。生きています。これも私の供養がさせてくれるのでしよう。以前は……」

「以前は？」

じつは王徐明、武后の凶事について全く知っていないのであった。その姉や姪がどんな死にかたをしたのか。

「とても恨みがましい顔をして現れたものですよ。だから毎晩夢をみるのが楽しくなりました」

武后の肖像画は、すでに十数枚に及んだ。どれを彫像の下絵に使用しても充分に役立つはず、と王徐明は思った。少年憚良の意見をただしても同じ答えがかえった。

五

もう冬の訪れだった。洛陽宮の庭で、落葉樹はすっかり裸にむかれていた。枯れ枝をゆさぶって吹き抜ける風は肌に沁みた。

でも則天武后の書斎は暖い。炕床に火熱がはいり、腰かけているだけで全身が火照って





「ただの石仏では無意味だと思います。石人でなければなりません。善導さまもおっしゃったではありませんか。阿弥陀さまのお慈悲によって目ざめ、救われて、仏となる姿……最初から完成した仏格では、かえってそのお慈悲を拒ばむことになるのではないでしようか」

武後の論旨には隙がなかった。

「石人……人間仏とおっしゃると、どんなお姿で」

「さあ、どんなと訊かれてもお答えできません。ただこれだけはおぼえておいて下さい。妾と瓜二つの顔をした姉は、妾から盗んだのですよ。姪の賀蘭もやっぱり盗んだのです。

盗んだ女たちでした」

「何を盗んだのですか」

武後は、艶然と笑んだまま、しばらく言葉をつながなかった。

「……妾から夫を盗みました」

「なるほど」

とうなづいてはみたものの王徐明には、どのように今の言葉を解してよいものか、見当もつかない。

「盗みを働いた女の顔や姿が、この絵には全く出ていません」

「王后さま、それは無理というものでしょう。あなたは盗みを働いていないのですから」

「そうでしたわね。今までは、たしかに盗みなぞ働いたことはございませぬ。でも、これから働いてみたらどうでしょうか」

炕床に敷きのべされた毛皮に、皺を立てながら武後はすり寄ってきた。王徐明の手をとらえた。

「王后さま、そんなこと……」

「妾がここで貴郎と天子を裏切れば、きっと在りし日の姉や姪の顔と瓜二つになるでしよう」

「王后さま、そんなことをしたら私どもは殺されてしまいます」

「殺される？　そう、それですよ。いつ殺されるかわからない不安の中で悦びに浸たりきる哀れな女。しかも男の愛を信じきって不倫に居坐ろうとするふてぶてしさ」

武后はとらえた王徐明の手を、自身の胸の奥へみちびき入れようとする。

「ああ王后さま」

「そのくせ、女はそんな罪惡の悦びに浸たっているときに最も美しいんですよ」

この感亨二年（六七一）の冬、則天武后は四十八歳になっているはずだった。しかし臙脂は肌の全面に浮き出て、指先で触れた乳房は若妻のような「張り」があった。乳首を吸えば、乳液がほどばしかったかもしれない。

武后は炕床に膝を立てると、男の肩を抱き寄せた。

「親嘴……」

うるんだ唇を突き出してきた。接吻を求めろのだ。王徐明は、重さね合わさずにはおれない。

長い舌が蛇身のように巻きついてきた。からんだその舌は口中で幻妙な動きをくり返す。この歳まで女体に未知だった王徐明は、たちまち恍惚境へ誘いこまれた。

舌先の交わりが深いささやきを分かち合うようになれば、あとの成りゆきは後退するということはない。武后の裳は炕床から舞い落ち、王徐明の烏帽子は飛んだ。お互いが半裸の姿になっている。

大整旗槍　分開少脚　架在椅上

挺起玉塵　向陰中左掬右模

像蝶求花心的光景

春梅就把兩手伸直抵住交椅

漸々把陰中湊上来了

迎合玉塵　玉塵住左以左承之

玉塵往右以右承之

春景を描述する文章は、なまじ読解しないほうがいい。文字を絵画として吸収し、幻想

の情景にかさね合わせてしまうことだ。

ついに武后と王徐明とは炕床上で一体となつた。あとはお互いの口唇から洩れる絶句だけしかない。

「呻々、吟々」

「啼々、唧々」

狂おしい肉炎と炕床の火気とがにふたりを灼き尽くした。お互いの身体を投げ捨てるようにして男女は、めいめい勝手な姿態で床に転ろがった。冷めたい板の感触が肉の余燼をさましてくれる。心地良い疲労と睡夢が全身をくるんだ。

突然、王徐明は武后の嬌声でわれにかえつた。

「おお、妾は天子さまを裏切った？ 殺される。殺されるんだわ」

「王后さま……」

「徐明、お前だって同罪ですよ」

「わかっております」

「明日、一緒に絞首台へ登りましょう。手に

手をとって、あい果てるんです」

「王后さま、覚悟はできております」

素直に応ずることができた。罪の悔いというよりも危険な喜びを知った快感が、いま王徐明の隅々にまでひろがってきている。女体への初体験がそんな陶醉境へ迷いこませるのであろうか。

「ほんとうに手をたずさえて死んでおくれなの」

「嘘もほんともございませぬ」

「嬉しいわ。天子さまは明日は都からお帰りになるでしょう。すべてを告白することにしませう」

「はい。そのように致します」

武后はそこで着衣を拾いあげると、無雑作に身体へ巻きつけた。

「徐明や。最後に描いておくれ。いまの妾の姿を絵にして下さい」

「はい、わかりました」

「この世における妾の最後の姿ですよ」



王徐明はふと、あの日役目からとは言え次々に絞め殺した女たちの顔を思いうかべていた。彼女たちに比べたら、自分の死はどれだけ贅沢なものであろうか。

「ああ、妾も嬉しい。徐明や、お前と安らかに死んでゆけます。さあ御前へ伺候致しましょう」

足もとに乱れは全くなく、武后は胸を張って書斎を出ていった。

だが、いったん庭へ降り立つと武后は九成宮とは反対の方角へ歩きだした。

「天子さまはどちらに？」

いぶかしげに問いかけた。

「九成宮ですが、伺候する前にちょっと寄ってゆくところがあるんです」

「私も一緒にですか」

「そうです。妾たちの運命を、そこで決めるのです」

洛陽宮は内庭の東側に洛水が引きこまれていた。そこに美しい朱色の橋がかけられ、さ

さやかだが「水郷」の趣きをたたえている。

この橋を渡ると、余り上等でない小屋が繁みのなかに建ち並んでいた。下婢や召使たちの住居だった。

武后はその一角に近ずいてゆく。

「ここは誰の家ですか」

「ただの占星師よ」

「城内にそんな者が住んでいたのですか」

「妾が住まわせていました。明崇儼という人でね、とても厭勝の術にすぐれているんですよ」

「厭勝ですか」

マジナイである。それも怪しげな貝殻などを焼いて占うのである。

「馬鹿にはできません。何でもズバリあててしまふんですから」

その明崇儼の住居は南隅にあった。長屋のなかでいちばん小さく、かつ粗末な家長家だった。まだ明崇儼の声価が高まらず、武后だけが認める程度だからであらう。



明崇儼と手を組んでやってもらわねばなら  
ない」

「マジナイをやるんですか。貝などを焼く  
んですか」

「それは明崇儼がやるでしょう。貴郎は、そ  
の出た結果について、道学から説明を加えた  
らいいんですよ。彼の厭勝はそれをやれば、  
いつそう権威が高まるでしょう」

有無を言わさぬ強制であった。術を厭勝師  
がやり、その裏付けの理論を王徐明がやる。  
必ずや万人を納得させるであろう、と武后は  
自らの立案に大満悦であった。

禁庭の中央へ出た。空は暮れなずもうとし  
ている。

「徐明や、今宵は陛下に未だお会いしない方  
がいいかもしれません」

「……………」

「罪を告白するつもりなら“時”も“場所”  
も選びませんが、そうでないとすればね」

薄明かりのなかで武后が黒く微笑むのが見

えた。

ふたりの秘密を高宗に隠くし通すというこ  
とは、王徐明をつねに“影の存在”として薄  
めることを意味してはいないであろうか。武  
后は男を夫に紹介しないつもりにちがいな  
い。

九成宮へ去る武后と別れて、合璧宮の方へ  
歩きだした。洛陽城の南隅、王城門のすぐ右  
手にある建物で、少年憚良をはじめ武后の縁  
戚親類の者が住んでいる。以前、洛陽城の規  
模が小さかったころは天子の側室たちの洞房  
だった建物である。

戸口でばったり憚良と顔を合わせてしまっ  
た。軽く会釈しただけで、王徐明は合璧宮の  
内へ逃げこんでしまった。

(つづく)

## ◎読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙七〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十三巻 三月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十二年二月二十五日 印刷

昭和六十二年三月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇二 振替東京八一八二一八七番

第五十三卷

三月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行  
昭和六十二年二月二二 五日印刷 昭和六十二年三月一日発行